1）著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。 Copyrighted materials of the authors.

2）研究会基本情報

「空間統治と民族関係の人類学―東南アジアを中心として―」（令和5年度第 3 回研究会）
日時：令和 6年 2 月 12 日（月）9:30～12:30
場所：AA 研 304 室

「先住民、華人、イスラム教徒：
スマトラ島東部沿岸に暮らすスク・アスリ社会におけるエスニシティのダイナミズム」

大澤隆将（AA 研共同研究員 金沢大学国際基幹教育院）

本発表では、インドネシアのスマトラ島東部リアウ州において、どのように民族的カテゴリやアイデンティティが形成されどのように維持されてきたのか、特に経済活動との関連性を検討しながら考察した。東部スマトラにおける民族的カテゴリは大きく、先住民諸集団（スク・アスリ、アキット、サカイ etc...）、華人系（含むプラナカン＝混血）、イスラーム教徒（ムラユ、ミナンカバウ、ジャワ）の３つに定式化されているが、この関係性はダイナミックである。歴史的にマラッカ海峡沿岸部において国家形成が進む中で、１９世紀までに先住民諸集団とムラユが区別されるようになった。さらに、１９世紀後半以降に華人と特に沿岸部に暮らす先住民諸集団の混血が進んだ。２０世紀以降には、先住民諸集団とイスラーム教徒の関係性は、華人との混血のなかでより遠ざかり、２１世紀に入ってからは、先住民権運動のなかで先住民共同体と華人社会の同一化が促進されている。こうした動態の中で、生業選択を含む経済的活動（例えば森林産物やマングローブ材の採集）は民族カテゴリとアイデンティティの成立・維持に、根本的な役割を果たしてきたことが強調された。いっぽうで、地理的な距離、環境的な周縁性、宗教政策、先住民運動などといった、直接的に経済活動ではない要素との関連性で民族性の動態をつかむことの重要性も指摘された。

跨境する「国家の介入しにくい空間」：ベトナム・カンボジアのメコン河流域社会とその混淆性

下條　尚志（AA 研共同研究員 神戸大学）

本発表は、ベトナム・カンボジア両国に跨るメコン河流域社会において「国家の介入しにくい空間」が 20 世紀以降、どのように出現してきたのかについて論じる。そのうえで、この地域一帯において「国家の介入しにくい空間」を創り出す社会的生態的条件が何であるのかを検討する。

発表者はこれまでベトナム南部メコンデルタのソクチャン省において、クメール人、華人、ベト人の通婚が進んできた混淆的な村落を中心に調査を行ってきた。そこで 20 世紀後半の動乱の最中、人々がいかに「国家の介入しにくい空間」から自ら秩序を紡ぎ出してきたのかを検討した。

ベトナム戦争末期、政府軍と革命勢力の狭間に置かれたその村落では、徴兵から逃れるために中立的な上座部仏教寺院で多数の男性が出家し、それを地域社会が黙認し、一時的に国家の介入しにくい秩序が生成された。戦後の社会主義改造期では、国家による集団化政策や食糧買い上げに対抗し、家や精米所で籾米を隠して闇市まで運搬する者、籾米を貨幣に見立てて土地の売買や籾米の貸付けを行う者が現れ、インフォーマル経済が活性化した。非合法越境ルートも生成され、難民・出稼ぎ労働者としてカンボジアへ移動する者もいた。20 世紀後半の動乱によってベトナム・カンボジア間で制御不能なほど広まったインフォーマルな秩序を、国家は公的な秩序のなかに編入しようと試みてきたが、それが軌道に乗り始めたのはようやく 21 世紀以降であった。特に国境管理において、両国を行き交う帰属の曖昧な人々の身元を調査し、パスポートを付与するなど、追跡可能な仕組みが構築された。両国の政治経済が安定し、国境ゲートがいくつも開設され、越境移動者は増加する傾向にあるものの、滞在時間・場所・行動という点において、動乱期の 20 世紀よりも越境後の移動が不自由化しつつある［下條 2021］。コロナ禍では、越境者の追跡が徹底され、国境や人間の帰属が顕著に可視化される事態が生じた。

以上で述べたように、国家が不安定化したとき、生存にとって欠かせない「国家の介入しにくい空間」を基盤に、人々は自律的に秩序を形成していた。その秩序は、絶えず浸透する国家の公的な秩序や市場経済とせめぎあい、折衝を重ねるなかで国家の当初の意図とは異なる形に生成されたという点で、国家でも非国家でもない秩序のあり方であったと言える。

近年、発表者はこの「国家の介入にしにくい空間」における秩序生成を、ベトナム、カンボジア両国に跨るメコン河流域社会というより広域的な社会的生態的条件に着目して検討する。歴史学者リ・タナは、「ウォーター・フロンティア」という空間概念を打ち出して、前近代東南アジアでは河川や海域が国家のフロンティアになっていたと論じる。複数の政治勢力が競合し、国家の力が相対的に弱かったメコンデルタからカンボジア、シャム南部、マレー半島にかけ、華人商人を中心に自由な交易世界が形成され、そこに様々なエスニック

集団が参入していたという。

前述した 20 世紀メコン河流域社会の動乱は、このウォーター・フロンティアが 19 世紀後半以降に近代国家による空間統治のロジックに包摂される過程で起こった現象であったと言える。もっともそれは、メコン河流域社会が元々国家の力の弱いフロンティアであったからというより、国家にとって包摂しにくい社会的生態的条件がそこに備わっていたからであると考えられる。具体的には民族的混淆性やインフォーマル経済の強さ、水域統治の難しさなどが挙げられる。

このようなメコン河流域世界の延長線上にある空間として、カンボジアのトンレサップ湖の水上生活者も捉えられる。近年のカンボジアでは、河川水量の減少に象徴される生態環境の変化と国家による定住化政策によって水上生活をやめ、河岸に家屋を建てる人々が増加している。もっとも、ID を持たない無国籍者は、マジョリティから「ベトナム人」と一括りにされ、土地を購入できず、水上家屋に居住し続けている。

発表者は、トンレサップ湖周辺の一部の水上生活者にインタビューを行い、そこに暮らしてきた人々が、20 世紀後半の動乱期に戦禍を避けベトナム・カンボジア両国を移動していたこと、そしてかれらの民族的ルーツが実際には「ベトナム」のみならず複数あること、またかれらが必ずしも恒常的に水上に住んでいたわけではなく、状況に応じて水陸の居住地を選択してきたことを仮説として考えるに至った。

これまでの広域調査で得られたデータに基づき、メコン河流域社会における「国家の介入しにくい空間」の収縮・拡大の過程と、その空間から紡ぎ出されてきた秩序のあり方を検討する。